ハイデッガー『形而上学入門』の思想

――存在の問いを問うこと――

西村　誠

ハイデッガーは一九三五年に「形而上学入門」という講義を行っている。この講義は彼が「形而上学の根本的な問い」と呼ぶものの考察と共に始まっている。その根本的な問いとは、「何故にそもそも存在者があるのか、むしろ無があるのではないのか」という問いである。この問いは存在者の存在の根拠を問うている。しかも「むしろ無があるのではないのか」と問うことによって、存在者からそれが存在者であることの自明性を奪い、存在者の存在の根拠を別の存在者に求めることを拒否している。「形而上学入門」という標題は、この問いを問うことのうちへと導き入れることを意味している。

だが存在者の存在の根拠を問うこの問いは、それに先立って存在そのものが十分に把握されることなくしては、本当に問われることも、況や答えられることもできないであろう。それ故にハイデッガーはこの講義で、「形而上学の根本的な問い」を問うことから更に「存在はどのような状態にあるのか」という問いを問うことへと進んで行くのである。この研究発表の意図は、この講義で述べられていることを参考にして、ハイデッガーにとって存在の問いを問うことがどのような構造を持っているのかについて考察することにある。

ところで差し当り我々の日常の経験において存在はどのような状態にあるのであろうか。ここに机が置かれている。我々はこの机に属している様々な性格を挙げることができる。だが机のどこに、我々はそれの存在を見い出すことができるであろうか。机の存在は形とか素材とか堅さのようには、存在者の表面においても存在者の内部においても更に一般に他のどこにおいても、直接に殊更に把握されることはない。だがもしも誰かが、「ここには机が置かれていない」と言ったとすれば、私は、「否、ここには机がある」と言って、その人に反対するであろう。我々はそれ故に存在という語が何を意味するのか知っているのである。

ハイデッガーは存在という語が空虚な語ではなく、むしろ規定された意味を持っているということを、「存在の本質のギリシャ的把握」を取り上げることによって明らかにしている。それに従えば、既に古代において存在とその他者（生成・仮象・思惟・当為）との区別が形成され展開され素描されていたのであり、そのような他者に対して限界づけられている点において、存在は「恒常的現前性」(die ständige Anwesenheit) という規定性を持っていたというのである。

しかしこの講義で彼が問題としていることは、単に存在は空虚な語ではなく、規定された意味を持っているということを示すことだけに尽きるのではない。「存在はどのような状態にあるのか」という問いを問うことにおいて問題であるものは、更に奥深いものを持っている。

彼は言う。「我々は存在はどのような状態にあるのか、存在の意味はどのようなものであるのか、という問いを問う。伝統的な様式の存在論をうち立てるためでも、或いはましてそれの従来の様々な試みの前で欠点を批判的に数え上げるためでもない。全く

別のことが問題である。人間の歴史的な現存在を、つまりいつも同時に我々の最も自己的で将来的な現存在を、我々を規定している歴史の全体のなかで、根源的に開顕されるべき存在の力のうちへと返し届けることが必要である」。確かに彼は「恒常的現前性」という意味での従来の存在の概念では、存在するものすべてを呼称するためには不十分であるということを指摘している。しかしその不十分さの指摘はこれまでの存在論の欠点をあげつらうためのものではなく、むしろその狙いは自らもそれによって規定されている西洋の精神の根本的な立場を顕にして、いわばそれを「存在の力」のうちへと歴史的に克服して行こうとするところにあるのである。

彼は「恒常的現前性」としての存在の規定にも関与し、今日なお存在の規定を支えている根拠を、古代の自然哲学者達における「存在の詩人的で思惟的な根本経験」にまで溯り、そしてその根本的経験が段々と覆われて行く過程を示すことによって明らかにしている。それと共にまたこの講義で、彼は現代の精神状況を存在の問いを「世界の暗黒化」として特徴づけ、この精神状況を存在の問いを問うことによって打開しようとしている。

このようなことから考察すれば、ハイデッガーにとって「存在はどのような状態にあるのか」という問いを問うことは、《将来的な現存在を根源的に開顕されるべき存在の力のうちへ返し届けるために、西洋の精神の歴史の始まりまで帰って行き、そこに隠されている可能性を根源的に反復しつつ、世界の暗黒化という時代の危難に関わる》という構造を持っていると考えられる。

それでは「世界の暗黒化」として特徴づけられるような西洋の精神の歴史の渦中にあって、ハイデッガーが反復的に取り戻そうとしている事柄はどのようなものなのであろうか。彼にとって西洋の精神の根本的な立場とは、「存在と思惟との区別」に他ならない。彼はこの根本的な立場が形成されて行く過程を「隠れなさの崩壊」(der Einsturz der Unverborgenheit) として捉えている。この場合「隠れなさ」とは、存在の本質に属しているもの、すなわち存在者が現象するために設けられた空間を意味している。そして彼はこの「隠れなさ」が存在を思惟の対象とするような人間のあり方においてではなく、むしろ存在に帰属するような人間のあり方において生起するということを、ソフォクレスの人間把握やパルメニデスの教説詩の解釈を通じて示している。このようなことからすれば、反復的に取り戻されるべきものは他ならぬこの「隠れなさ」であり、従ってまた存在に帰属するような人間のあり方であると考えられる。

だがそれにしても人間は死すべき有限な存在者である。たとえ存在という畏ろしいものを言葉にもたらすとしても、決してそれを征服することはできないであろう。むしろ人間は存在の威力に当って砕けざるを得ないと思われる。ハイデッガーはここに人間の一つの独自な本質規定を読み取っている。それに従えば、人間の本質は存在が自らを示すために必要とする「存在開顕の場所」(die Stätte des Seinseröffnung) であり、しかも人間は存在そのものによってそのようなあり方へと置かれているとされる。

存在の問いがこのような「存在開顕の場所」としての人間において初めて本当に問われ得るとすれば、この問いを問うことは存在そのものによって生起させられるのであり、またこの問いを問う者は問うべく存在そのものによって強いられているのではなかろうか。